

第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 工藤 和恵

所 属(Affiliation): 基幹研究院・自然科学系

今回のシンポジウムでは、当初は随行教員として参加の予定だったが、開催の2週間ほど前に急遽日本側の Chair 引き継ぐことになった。教員としての参加は今回で5回目になる。準備段階では関わっていないため、ここでは主に当日の運営と参加学生の様子について、簡単に報告する。

1. 旅程などに関して

今回のシンポジウムは昨年度より1週遅い12月12日～14日に開催した。当初は11月上旬の開催が検討されていたが、結局この時期に決まったようだ。来年度は11月中旬の開催を検討している。梨花女子大では試験期間と重なっていることもあり、3日間通しての参加者は少なかったように見受けられた。日本女子大学からの参加者は、今回は学生だけでも18名あり、お茶大と同じくらいの参加者数だった。大人数での移動は時間や手間がかかるが、特に問題なく移動できた。

2. 研究発表に関して

今回のシンポジウムでは、教員発表が4件、口頭発表が57件、ポスター発表が82件あった。シンポジウムの口頭発表セッションは昨年同様、4つのセッションで行われた。昨年度と同様に、参加教員の審査にもとづく発表賞が設けられ、各セッションおよび各大学から1名ずつの学生が表彰された。シンポジウムの開催までの英語プレゼンテーションに関する演習や、本番1週間前のリハーサル成果もあって、しっかり準備して発表に臨んでいるのがよくわかった。

私が出席した統計・数学・計算科学セッションでは、韓国側と日本側の参加者が半々くらいで、お茶大からは2名しか発表者がいなかった。お茶大からも数学分野からの参加者がもっと増えるとよいと毎回感じている。分野が違いすぎることもあり、なかなか議論が発展しなかったのが少し残念だった。

ポスターセッションは例年通り廊下で行われた。今年は開催期間中のソウルの気温が非常に低くなり、場所によっては立っただけでも凍えそうだったが、それに耐えて自分の発表をしたり、他の人の発表を積極的に聞いたりする学生の姿勢が見られた。

3. その他

来年度のシンポジウムに関しては、梨花女子大学側では既に Jae Youn Ahn 先生が責任者を務めることが決まっており、大枠は例年と変わりなく開催される模様である。日程や開催方法については、今後議論を進める必要がある。今回は、ここ数年間宿舎として利用してきたホテルが、数か月前にオーナーが変わったということで、多少の混乱が起きていた。フロントの体制などで不用心な部分もあり、多少の不安をおぼえた。今回は大きな問題は起きなかったが、利便性よりも安全性を重視して、次回以降の宿舎を検討する必要があると感じた。

第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 由良 敬

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・ライフサイエンス専攻

今回のシンポジウムにおいては、随任教員として参加させていただいた。ここでは、参加学生の様子についてなど簡単に報告する。

1. 旅程などに関して

今回のシンポジウムは昨年度よりも1週間遅い12月12日～14日に開催された。今年度も優秀な研究発表には、発表賞を出すこととした。賞を与えることで、梨花女子大学の参加学生数を増やすことができた様子である。しかしそれでも、学年末試験とシンポジウムがほぼ同時に開催されているために、梨花女子大学学生および教員の参加がなかなか増えないようであった。この対策として、来年度は11月下旬の開催を検討することとした。シンポジウム参加にあたっての旅程にはほとんど無理はなかったと思う。今回は、ソウルでの宿泊ホテルに多少トラブルがありやや問題が発生したが、大きな問題になることはなくシンポジウムを無事に終えることができた。

2. 研究発表に関して

今年度は Gouraud Sabine 先生に9月から週1回90分間、英語口頭発表とパワーポイントの作成法、および質疑応答の演習を担当していただき、10月から松本佳穂子先生に、アカデミック・プレゼンテーションの講義を開催していただいた。シンポジウム参加学生は、いずれかの演習を履修した。参加学生の発表能力および英語力は、当初は決して高くはなかったようだが、演習の最後には、英語による講演ができるようになったようである。シンポジウムの口頭発表セッションは昨年同様、4つのセッションで行われた。上記発表賞に関しては、各大学各発表分野から、参加教員の審査にもとづき優秀な学生を選考し、総計12名の学生に賞を与えることができた。私が出席した生物セッションにおいては、今年度も本学と梨花女子大の学生とで、発表能力の差はさほどないと感じた。シンポジウム全体においては、発表に対する質問が多くの場合、教員のみからなされたことは残念だが、学生が質問をする場面が多少は見られたことは、重要な点として指摘しておきたい。質疑応答の様子を見ることで、質問に対して適確に回答をする能力を養成することが、これから必要であることを認識した。

3. その他

今年度は、梨花女子大学の理学部長との話し合いをする時間はもてなかった。しかし今年度シンポジウムを担当された Kyungkon Kim 先生、来年度シンポジウムを担当される Jae Youn Ahn 先生、薬学部の Sun Choi 先生、および物理学科の Taeyoung Choi 先生と話し合いをする機会をもてた。その中で来年度もシンポジウムを梨花女子大学で開催することでほぼ合意がとれたと理解している。これからの交渉が重要になっていくと思われる。今回から導入した学生発表賞は、梨花女子大学側の参加教員と学生を増やすこと、および学生全般の参加意識を高める機能はある程度は果たしたと思う。来年度に向けて、より効果的な方法を模索すべきであろう。

第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 曹 基哲

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・理学専攻

1. 全体について

お茶大からの参加者数はほぼ例年と同程度と思われるが日本女子大学側参加者数(教員・学生共に)大幅に増えていたのが印象的だった。梨花女子大学側の参加教員は(人は入れ替わっているが)例年通りと思われる。東京出発から戻ってくるまで、特にヒヤリとするような場面もなく、全体に滞りなく運営できたのは各大学実行委員長達のご尽力と参加学生の自覚のためだと思われる。些細なことではあるが、現地の空港から地下鉄で移動中、自動ゲートにスーツケースを引っ掛けて出られなくなる例がいくつかあった(最終的には出られたのだが)。出発前研修で、スーツケースを持っている際のゲートの通り方について教えておくとういと思われる(大人数での移動のため、ゲートが詰まるとちょっとした混雑を引き起こしてしまうので)。

三大学の教員間の交流としては、梨花女子大学側の配慮のおかげで複数回、食事を共にしながらそれぞれの大学における教育、研究、運営などについて意見交換を行う場が設けられた。梨花女子大学側は新しく着任された先生が複数参加されていたので、新しい視点で本シンポジウムに関する意見などを伺えたのが大変良かった。Professor session で講演された Choi 先生は、新しく研究室を立ち上げたばかりなので、ここでの講演で日本からの参加学生、教員に自分の研究を知ってもらい、あわよくば自身の研究室に留学生として来てくれれば、という意気込みで臨んでおられたのが印象的であった。

2. 研究発表に関して

口頭発表は物理分科のみを見たが(Best presentation awards を選ぶ必要があったため)、英語による発表に関しては個人差が大きかった。しかし、英語での口頭はある程度回数をこなしながら上達していく場合が多いので、このような発表の機会を持つことは大変重要だと思う。語学以上に、人前での発表を前提に自分の発表を進める動機づけにこの場がなればよいと思う。一部の学生に、発表のセリフを紙に書き出し、それを読みながら(聴衆やスクリーンを見ること無く)発表を進めていく例があったが、それはいただけないと思う。ポスター発表では、あまり学生の行き来がなかった(各自がポスター発表を担当しているので仕方ないとも言えるが)ので、例えばポスター発表を前・後半にわけて、ポスターを見て回る機会を設けるのも(スケジュール的に可能なら)よいだろう。

3. その他

宿泊先ホテルの管理・運営に難があった。何か事情があったようだが、ホテルとして正常な運営(例えばフロントデスクを空にしない、など特にセキュリティ面)をしているところを宿泊先にすべきだろう。

第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 赤松 利恵

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・ライフサイエンス専攻

第8回日韓3女子大学交流合同シンポジウム(2017年12月12日(火)~14日(木);韓国ソウル梨花大学校)に、随行教員として参加した。シンポジウムおよび旅程について、報告する。

1. シンポジウムについて

シンポジウムは3日間に渡って開催された。1日目は午後3時から、ホストのChairであるKim先生の司会のもと、開会式が行われた。梨花大学校 College of Natural Sciences のLee学部長、今年度日本女子大学 Chair の島田先生の開会の言葉の後、参加教員の自己紹介があった。その後、2人教員の講演(各30分)があり、1日目は終了した。2日目も朝9時と昼食後に教員の講演(各1名)があった。それぞれの教員の講演後、午前と午後に学生の研究発表があった。学生発表は、4つのセッションに分かれて行われた。学生一人当たりの発表時間は、15分(発表12分質疑応答3分)であり、座長も学生が行った。私が参加したセッション(Bio)では、何人か質疑応答で戸惑い、母国語で議論する場面も見られたが、どの学生も時間を守り、練習の成果が見受けられた。学生からの質問もあったが、まだ限られていたように感じた。しかしながら、3日目のポスター発表では、学生同士活発に議論をしており、同じ内容でのポスター発表は、コミュニケーションのきっかけになり、かつ研究の理解を深めることに、役立っていると感じた。ポスター発表後、11時から閉会式が開催された。学生発表賞の表彰の後、今年度のお茶の水女子大学のChair 工藤先生およびLee学部長の閉会の言葉で、シンポジウムは終了した。

2. 旅程について

帰りの空港での待合せに、30分以上遅れる学生がいた。重大なトラブルはなかったものの、緊急時の連絡の取り方について、事前に確認しておく必要はあるかもしれない。また、宿泊ホテルの安全性が疑われる場面が何度かあった。今年はトラブルもなく終えたが、来年の開催では、宿泊先は再検討する必要があると考える。

食事については、朝食、夕食のみならず、飲み物・軽食を、梨花大学校が用意くださった。スタッフ学生の方々の対応もよく、先生方も常に気を配ってくださり、申し分のないおもてなしであった。

3. その他

今年度食物栄養学科から学生が発表することになり、初めて参加させていただいた。研究分野が異なるにもかかわらず、学生の参加を認めていただいたことに感謝する。食物以外に生活工学からの学生発表もあり、そのセッションに先生した先生から、もっとこのような応用研究の発表が増えれば、セッションを分けられるのでは、というご提案をいただいた。今回参加した学生が来年度の参加者の増大につながっていくことを期待する。